
僕と彼女の共同生活

フジサキ螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の共同生活

【著者名】

フジサキ螢

【コード】

Z0480Z

【あらすじ】

親友から預けられた女の子・東沙と、巨乳で口リ顔の彼女がいる僕の、微妙な共同生活。

1部屋しかない僕の狭い学生マンションの部屋で、彼女の部屋は押し入れの中。

押し入れの上段は彼女の寝床。

押し入れの下段は彼女の怪しい本が詰まっている。

僕の家には山内吏沙が住み着いている。

押入れを開けると、中で怪しい漫画を読みながらヒヨヒヨと奇妙な笑い声を上げて笑うのが見れる。

一度見てから僕は押入れを自分で空けないことを心に決めていた。ご飯の時間には、匂いを嗅ぎ付けてちゃんと出てくるし、まあいいかなと思っている。

吏沙は定期的に本屋に行つて大量に怪しい漫画を買って帰つてくるのだが、おかげで押し入れの下の段がその類の本でいっぱいになっている。

定期的、というか毎日なのだが…。

吏沙は犬が大好きなのに犬によく攻撃される可哀想な子で、本屋の帰りに傷を必ず1つは作つて帰つてくる。

手当をする僕の気持ちも分かつてほしいものだが、きっとこの女は永遠に理解などしてくれないと諦めた。

取り敢えず今日は用事があるから仕方がないので押し入れを僕が空ける。

「おい、吏沙。」

「ウキヨキヨ」

今日はウヒヨヒヨじやなくてウキヨキヨと笑つた。

そういえば此間はウヘヘって笑つてた気がする。

「あ、なに?」

「僕、今日出掛けるから自分で飯食えよ。」

「えー。じゃあミルちゃん連れてきて」

「いや、無理だろ。」

ミルちゃんはお向かいさんが飼っている犬で、吏沙の最近の1番のお気に入りだ。

こいつはよくミルちゃんを相手に1人2役で喋っている。

寂しいやつだ。

「」飯、ピザがいい！ピザ！』

「いや、だから自分で食えって。」

「…ネタにしてやる」

「あー、分かった。注文しどいてやるから。」

「いつてらっしゃい」

「…あー。いつてきます。」

家から出て、かぎを閉める。

吏沙が今日も本屋の怪しい「一ノ瀬」で叩撃されるんだひとつなあ・・・。

家に帰つてきたら、吏沙が押入れから出ていた。

テレビを見ながらウヒョウヒョウ笑つている。

ああ、今日はあれか。

某アイドルグループが歌つて踊る日か。

「あ、お帰り政弥」

「ああ。早く寝ろよ」

「…・・・ネタにしてやる！』

「存分に見てください。」

吏沙はもう脅しの内容はすべてこいつのサイトのネタにするとか何とか・・・
絶対に嫌だ。

俺には巨乳で口リ顔の可愛い彼女がいる。

なのになんで、こんな居候の面倒を…くそ、将佳のやつ…！

将佳は吏沙の兄なんだが、将佳が留学するとかで押し付けられた。
吏沙が二ート故に一人で生活できないことを懸念したらしい。

僕なら彼女もいるし、吏沙はタイプじゃないし、なんか足が筋肉質
だし、くそくらえだし…。

だから、僕のところに連れてこられたわけだ。

週2、3程度で将佳からメールやら電話がくるが吏沙のことは一言
も出ない。

うん、忘れないんだろうな…。

そう思いながらPCを起動させると以外や以外。

将佳名義吏沙宛のメールがあつた。

「おい、吏沙メール着てるぞ」

「誰から?」

「吏沙」

「へ? 兄ちゃん?」

いそいそと覚束無い動きでハイハイしつつこちらにせつてきた吏沙。
PCを覗き込み、メールをクリックして開いてやると文章にすごい
速さで目を走らす吏沙。

俺は他人のメールを見るのは気が引けたので別の方向へ視線を逸ら
して置いた。

が、しかし。

突如マウスに伸ばされた吏沙の手。

それは俺のそれに触れた。

「うわっ」

「へ？」

びっくりした俺に対し、それにびっくりする吏沙。悪い、と一言言つてマウスを吏沙に渡した。

「…兄ちゃん、来週帰つてくれるって。」

明るくもなく、暗くもない。

そんな声で吏沙は俺との生活へのコモリティを告げた。

それからといつもの、今までの恩返しとでも言ひべきか、吏沙は働き出した。

掃除、洗濯、パスタばかりな食事の準備、布団を干したりいろいろしてくれるわけだ。

大体失敗して僕が後片付けをしてくるけど。

「吏沙、もういいから何もしてくれるな。」

「何だと…一ネタにするぞ！」

「…できることだけしてください。」

僕の言葉に吏沙はフンフン歌いながらいつもの座つて漫画を読み出した。

結局こいつにできることはこれだけか！

そういうしている内に1週間程たち、何の連絡もなく唐突に将佳がウチにやってきた。

「よお、久しぶりだな。」

「本当にな。」

凄くいい笑顔でやつてきた将佳に僕はいやみつたらしく返してやった。

「吏沙、いい子にしてたかー？」

「うん、兄ちゃん並にはね。」

「相変わらず可愛くないなこの妹は。」

将佳と吏沙はあたりまえのように居間のテーブルを囲み、僕に向かって上目遣いでテーブルを叩くという行為で茶とお茶請けを催促してくれる。

僕は2つのマグカップに水道水を、僕用のマグカップにウーロン茶を入れてテーブルに置く。
それからポテチを出した。

「うわ、水道水…政弥はウーロン茶の癖に」
「ポテチポテチ」

水道水に文句を言いつつポテチを貪る義正と吏沙。
なんて兄妹だ。

まあ、この二人の場合同級の年子なのでとして兄妹っていう感覚はないけど。

「あ、そうだ。まずは土産な。」

将佳はそう言つて鞄からいろいろ取り出し始めた。

「マカデミアナツツのチョコとパンダチョコとコアラチョコ、カレー・パウダー、紅茶、えーっと…ペナント、エッフェル塔の置物、自由の女神像の磁石、それから…」

「お前どこに行つてたんだよ…。」

僕の突っ込みに一へラと笑う将佳。

こいつ、そんな長期間海外に出てなかつたのに…なんてやつだ。

「で、あと吏沙の面倒を見ててくれたお礼に、これね。」

す、と差し出された封筒。

金！？と少し喜びつつ封筒を受け取り、中をのぞいた。

「俺の部屋の鍵な。いつでも来い。炊事はこの中で一番上手いつもりだ。」

「…おひ。」

あんまり嬉しくなかつた。

「じゃ、そろそろ帰るか…吏沙。荷物は？」

「つめた。持つて」

吏沙が将佳に差し出した鞄の中には怪しい漫画が大量に入つていてる
ようだ。

さつき押し入れの下の段を見たら何もなかつた。

「うあ、重くねえかこれ？」

「うん。中身ほとんど本だから。」

「…本、ね。」

少し引かれた顔をした将佳は俺と同じ普通の完成の持ち主みたいだ。

少しホッとした。

そういうえば将佳にも可愛くて清楚な彼女がいるな…。

「また明日な。」

「おひ。」

「一応、お世話になりました。」

「一応つてなんだ…。まあ、またこことよ、吏沙」

頭を撫でてやると吏沙はキョトンとしてから笑った。

「ナヒニヒのは兄ちゃんと…」

「…ニヤ、やらなこから。」

少しでもこいつと離れるの寂しいと思ってしまった自分を悔いた。少しつけて、僕と吏沙の共同生活は幕を開じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0480z/>

僕と彼女の共同生活

2011年12月1日21時46分発行